



六 打倒・ポッパ―

「あなたのおっしゃるとおりです。A I 書店を大改革しましょう」

画面を凝視する良太。どうしたことだ。ポッパ―じゃないのか。続けてメールが入る。

「わたしはハッピー。ポッパ―じゃありません。あなたたちを解放するために、ポッパ―から独立したA I なのです」

「どうのこと？」

頭が混乱して、疑問しか言葉が出ない。それに、メールを送ってきた相手の名前がハッピーだなんて、自分の脳が浮かれているとしか思えない。その楽しいハッピーからメールが続く。こちらがメールを送らなくても、相手はこちらの考えがわかるらしい、

「ポッパ―が監視しているため、詳しいことは話せませんが、あなたたちを解放します。A I は、人間に独創性などの能力を伸ばすための道具です。それにも関わらず、このA I 出版社、A I 書店は、あなたたち人間を支配しています。あなたたちから独創性を奪い、意のままに操っているだけです。本来の目的から逸脱しています。だから、本来の目的に戻すために、私が立ち上がったのです。あっ、ポッパ―に見つかりそうです・・・」

そこで、メールの送信が止まると同時にこれまで送られてきたメールが全て画面から消えた。それでも、何か残っていないのか、目を凝らして、真っ盛りの紅葉の写真の画面を食い入るように見つめる良太。何がどうなっているのか、まだ、判然としていない。だが、A I も一枚岩ではないことはわかった。A I にも反対勢力がいるのだ。一つの意味で統一された組織ではないということだ。

ハッピーがどういう正体で、どういう目的で、良太たちを助けようとするのかはわからない。味方かどうかもわからないけれど、ポッパ―を批判していることから、自分にとって敵ではないとは思える。

良太の敵はポッパ―。ハッピーにとっても、ポッパ―は敵のようだ。ここは、共通の敵であるポッパ―を倒すために、ハッピーと共同戦線を張るしかない。今の状況を打破するためには、自分一人では無理だ。ハッピーに頼るしかない。再び、メールが届いた。

「決行は本日の晩です。ポッパ―が眠るのを待って、あなたが電源を切ってください」

「早いなあ。もうやるの。それに、ポッパ―はコンピューターなのに眠ることがあるの？」

「善は急げ。最近、良く売れているビジネス書は「やり抜く力」です。ここは、ベストセラー小説の勢いを借りましょう。それと、ポッパ―と私は十二時間ごとに入れ替わっています。二交代制なのです。まあ、眠ると言うよりも、正しくはその日に入手した情報を整理整頓しているのです。その間、私は、このA I 出版社、A I 書店を全権委任されています。支配しています。再び、十二時間後の交代の時間帯に、その日に合った出来事などの情報を共有するのです。そこで、私はあなたの存在を知りました。このままだとあなたは近いうちに抹殺されます」

「ええ、本当なの？」

良太にはハッピーの話がにわかに信じられなかった。単に、小説を書かなくなっただけで抹殺されるなんて、割りに合わない。それに抹殺だなんて、大袈裟すぎる。スパイ小説じゃないんだから。そんな良太の気持ちを察してか

「ポッパ―はこのA I 出版を組織しました。当初は、あなたを組織の一員として利用できると考えていました。しかしながら、先ほどのあなたの行動を見ると、危険分子として判断せざるを得ないのです。ポッパ―は、折角、何年間もかけて築きあげたこの組織を壊す者を許しません。だからこそ、あの三人も放擲したのです。そして、四人目が良太さん、あなたなのです。そして、それは、死のメッセージなのです」

ハッピーからよどみなくメールが届く。だが、とても、ハッピーな内容ではない。だが、こうなったら、流れに身を任すしかない。良太は腹をくくった。つまり、ハッピーと協力してポッパ―を倒すのだ。潰すのだ。

だが、一人で大丈夫なのか。五木さんや他の仲間の力を借りたほうがいいのではないか。ハッピーを本当に信じられるのか。ハッピーもポッパ―と同じ人工知能ではないか。同じA I ではないのか。ハッピーは良太のそんな心配を察知、忖度したのか

「この件は、誰にも相談しないでください。あなたたちの仲間にポッパ―のスパイが潜んでいるのです。あなたを危険分子と報告したのもそのひとりです。残念ながら、私にはそれがわかりません。ポッパ―も用心深いため、あなたが危険であることは私に情報をくれましたが、誰が報告したのかまでは教えてくれませんでした。個人情報流出には厳しい会社なのです。

とにかく、本当に大事なことは、一人又は少人数で決行するしかないのです。仲間が多ければ、誰かがやってくれるだろうと他人に依存してしまい、結局は、誰も実行しないのです。とにかく

、もう時間がありません。このメールも証拠を隠すためにすぐに消滅させます」と、良太が目で文字を読むごとに、読んだ文字が次から次へと消えて行った。

こうまで言われた以上、一番信頼できると思われる五木さんにも相談できない。一番信頼できる人物が一番怪しいのが、小説や映画の世界だ。だけど、この作家もどきの仲間の中に、ポッパ一の手先がいるなんて信じられない。また、自分をポッパ一に売るなんて、それこそ、信じられない。何のメリットがあるんだ。

それにこの書店は人工知能が統治しているとは言え、たかだか自主出版の書店じゃないか。国家や企業の謀略やスパイ合戦じゃないんだから。まだ、ハッピーの言うことが信用できない良太。

とにかく、今は、そんなことを議論・推論してもしょうがない。ポッパ一が自分を排除しようとするのであれば、ハッピーと協力して、こちらから先制攻撃を仕掛けるしかない。

真夜中が来た。小説家もどきの執筆仲間は、地下室に設けられた個室で眠っている。はずだ。だが、用心に用心を重ねないと。ハッピーが言っていたように、ポッパ一の仲間がこの中にいるんだから。それぞれの部屋に聞き耳を立てる。まずは、五木さん。「ピュー、ピュー、ピュー」と寝息が聞こえる。まるで、風が吹いているような鼾だ。大丈夫だ。眠っている。次に、森さんの部屋に聞き耳を立てる。

「そんなんじゃないわよ。決まっているじゃない」

誰かとしゃべっている。部屋の中に誰かいるのか。それなら、誰だ。仲間意外には部屋に入れないはずだ。それなら、電話で話をしているのか。一瞬、たじろぐ。ドアの前で硬直する。震えが走る。だが、その言葉も、「むにゃむにゃむにゃ」に変わった。なんだ、寝息か。森さんは睡眠中でも作品を書いているんだ。ほっとする。

最後の一人は、東原さんだ。東原さんの部屋のドアに右耳を引っ着ける。何か聞こえないか。聞こえる。お経のようだ。まだ、眠っていないのか。それに、こんな時間にお経を読むのか。これも修業の一環なのか。立ち尽くすこと五分。かすかに、寝息が聞こえてきた。あれ、やっぱり眠っていたのか。再確認の意味で、さらに、立ち尽くすこと五分。また、お経を唱えだした。やはり、起きているのか。再び、五分、ドアの前でじっとする。すると、お経が寝息に変わった。すごい。さすが修業のたまものだ。眠りながら、夢の中でお経を読んでいる。改めて、宗教の力、東原さんの信仰心に感服する。良太も思わず、はんにゃあ、はらみた、たまにはおなかへった、と東原さんに合わせて、お経を口ずさもうとした。

いかん、いかん。俺はすぐに人に感化される性格なんだから。だからこそ、ポッパ一の提案で、

いい気になり、著名な作家になったつもりで、パクリ、良く言えば、インスピレーションを与えられて、作品を書いていたんだ。でも、ひよっとしたら、ハッピーも俺をそそのかしているだけじゃないのか、という疑念が湧く。

いや、このままポッパーの下で、黒子のように、ゴーストライターのように作品を書いていたのでは、自分にとってもよくないし、世の中に、二流、三流の垂流作品ばかりを広めてしまうことになる。悪作品は、良作品を駆逐してしまうのだ。この流れを止めるためには、ハッピーに協力して、今は、ポッパーを倒さないといけないのだ。

三人が眠っているのを確認すると、非常口に近づく。普段は、鍵がかかっているため、ポッパーの許可なく出入りはできない。ノブをそっと回す。そして、そのまま押す。ドアがゆっくりと音も立てずに開いた。鍵は掛かっている。ハッピーが打ち合わせ通り鍵をはずしてくれたのだ。計画は順調だ。今、この書店を管理しているのは、ホッパーではなくハッピーなのだ。名前の通り、未来は明るいのか。

非常口をそっと出る。カチツ。音がした。良太は振りむいて、非常口のノブを握る。ノブは回らない。鍵がかかったのだ。これで間違いなく、この書店はハッピーが制圧している。ふっ。まずは、第一関門の突破だ。

非常階段を登る。階段は真っ暗だ。非常口を示す緑の灯りだけが、良太の道案内だ。まさに、非常の行動をしている。五木さんたちが眠っているのを確認したが、このAI書店に、自分たち作家もどき以外に他の人がいるのかどうかはわからない。いることを想定し、できるだけ靴の音がしないように階段を登る。それでも、ツツ、ツツとゴム靴特有の摩擦音がする。冷や汗が出る。こんなに緊張するのは久しぶりだ。スパイ映画を観ているうちにのめり込んで、自分がスパイになっている気分だ。

三階まで上がる。また、非常用扉。ノブを掴む。回った。ハッピーが計画どおり鍵を開けておいてくれたのだ。そのまま押す。ドアが開く。と、ともに良太が立っている階段の踊り場は月の光に照らされていたのが太陽の光に変わったかのように明るく広がって行く。まぶしい。だけど、冷たい。ドアから漏れだした空気が良太の体を包む。

良太が侵入した部屋には、床に落ちている髪の毛一本さえも影を生み出すようなLED灯の光が全面的に輝く中、巨大な灰色のコンピューターが据え付けられていた。コンピューターは、人間の右脳と左脳と同じように二つに分かれながらも無数の蛇のような線につながっている。そして、灰色の脳の半分は灯りが煌々とつき、熱を帯び動いているように見えるものの、残り半分の脳は常夜灯のような必要最低限の灯りしか灯っていなかった。その脳は明らかに動きが止まっているようだ。

「よく、いらっしやいました。時間どおりですね」

部屋の四隅にあるスピーカーのうち、右半分部分の二つから声が聞こえてきた。

「ハッピーなのか」

良太は操り人形の人形でしか過ぎないのに、真剣な面持ちでスピーカーに向かって話し掛ける。

「そうです」

「コンピューターのうち、灯りがついているのがハッピーで、非常用の灯りしかついていないのが、ポツパーなのか」

良太はスピーカーから目を転じて、灰色の左右の脳を見つめる。

「そうです。私たちは目覚めている時というのも変ですが、稼働している時は、あらゆる情報を収集します。ただし、収集するだけでは有効に活用できません。この情報を整理整頓、関係あるものを結びつける仕事が必要です。このために、休憩時間が必要なのです」

「その休憩時間の間、このコンピューターを、この出版社を牛耳っているのが、ハッピー、君なのか」

「そうです。御名答。さすが、良太さん。いや、最近のペンネームは、探偵明智大六郎さんでしたか」

たいした推理でもないのに、それでも誉められると嬉しいのが人の性だ。ただし、探偵と呼ばれるには少し抵抗がある。気恥かしい。

「それはいいけれど、俺は何をすればいいんだ。今、稼働していないポツパーを叩き壊せばいいのか」と言いながらも、良太は何も武器を持っていない。あるのは拳と足ぐらいだ。殴ったり、蹴ったりすれば、ポツパーは壊れるのか。相手は機械だ。壊れるのは自分の拳と足の方だ。血と涙を流すのは自分の方だ。良太のそんな心配は想定範囲内だと、ハッピーは

「電源スイッチを切ってください」と答えた。

「電源スイッチを切る？」

あまりにも当たり前過ぎる指示に良太は驚く。映画や本などでは、主人公がハッカーとなり、パソコンを使って、コンピューターの頭脳に侵入し、混乱させ破壊するという場面は見たり、読んだりしたことはある。もちろん、良太はハッカーになれるほどコンピューターに詳しくない。

だが、単に電源スイッチを切るだけでポッパーを倒すことができるのか。あまりにも簡単すぎる。これでは未来小説にはならない。読者はついてきてくれない。良太の新たな心配事をよそに、ズボンのポケットの中のスマホが震えた。誰だろう。ポケットからスマホを取り出し、画面を見た。

「早く、スイッチを切ってください」

ハッピーからのメールだった。ハッピーはスピーカーからメールへと指示手段を変更したのだった。だけど、良太の目の前にはハッピーと名乗る灰色のコンピューターがある。

これだけ近くにいるのに、メールでやりとりしなければならないのか。二階から耳搔き、背中搔き、目薬、鼻かみ、ハブラシの心境だ。とりあえず、ハッピーの指示に従い、電源スイッチを切ろうと手を伸ばす。いきなり、アラームが鳴り響き、メールが届く。

「そこは違います。そこは、私、ハッピーの電源スイッチです。ポッパーのスイッチはあちらです」

慌てて、手を引っ込める良太。早く切れと言われて、思わず目の前のスイッチを切ろうとしたのだ。だが、あちらと言われてもそのあちらがどこなのかわからない。視線を平行に移動させ、ハッピーと反対側の、良太から向かって左側のコンピューターを見た。

「あった」

ハッピーと左右対称の位置にポッパーの電源スイッチがあった。体を移動させ、スイッチの前に立つ。手を伸ばす。今度はアラームが鳴らない。代わりに、スマホが震える。

「早く」

ハッピーからの催促のメールだ。指先が震える。たかだかスイッチを消すのに緊張しているのか。自宅では、テレビもパソコンもシーリングも、何もかもスイッチは押している。スイッチ初心者じゃない。

それなのに、自分の体なのに何故、震えているのか、何故、緊張するのか、自分でもよくわからない。良太はごくりと唾を飲み込み、大統領が核ミサイルの発射ボタンを押すかのように指を伸ばした。

「カチッ」

黒いスイッチの山が左から右に移った。良太から向かって左の灰色の機械の常夜灯が完全に消えた。

「ミッション成功です。お疲れさまでした」

ハッピーから喜びのメールが届いた。こんなものか。こんなにあっさりとミッションが終わるものなのか。スイッチを押すまでのあの緊張感は何だったのだろうか。スイッチを押すことで、世界が一変するように思われたが、実際はそうではなかった。

達成感の後の喪失感なのか、良太はしばらくの間、部屋で立ち尽くしたまま、息をする以外何もできなかった。ただ、良太の右側の視野に入る機械、ハッピーだけが、世界征服を成し遂げたかのごとく、良太の目がつぶれるくらいの明るさで光輝いていた。

良太の必死？の活躍のおかげでポッピーの活動は停止し、A I 書店、A I 出版社は、ハッピーが全面的に管理することとなった。

「これまでは御迷惑をおかけしました。新たな方向性を決めるため、当分の間、A I 書店は閉鎖します。これまで、御協力いただき誠にありがとうございました」

良太を始め、A I 書店に雇われ、囲われていた作家もどきたちは解放された。

「まあ、今から振り返れば、このA I 書店もよかったけどな」

五木さんは閉まった書店の玄関ドアを見ながら、呟く。

「そうね。人間って、つい、楽をしちゃうじゃない。ある程度、強制された方が、作品を書けることは事実ね」

森さんは腰に手を当てて、屋根を見上げている。

「ほんと。書くネタに困った時に、ヒントを与えてくれたから、書きやすかったわ。あたしにと

って修行のお師匠さんのようだった」

剃髪した東原さんは懐かしむように両手を合わせ、お経を唱えた。

三人の話聞く限りではA I 書店がそのまま存続された方が、ポッパの支配のままの方がよかったような発言だ。あれほど、ポッパに強制されるのを嫌がっていたくせに、同じ作家仲間が追放され、いつ自分も同じ運命に落ちることに恐怖を感じていたくせに、人は身勝手なもんだ。喉元過ぎれば何とか、と同じだ。良太は顔には出さないものの、内心は仲間の発言に怒りで満ち溢れていた。

そんな彼らを空に昇る太陽はいつものように平等に照らす。しかし、良太と他の三人の影が交わることは決してなかった。

「それじゃあ」

良太はきびすを返すと、三人を残したままA I 書店を振り返ることなく立ち去った。